

1 文学的文章の読解① (物語)

学習日

—

問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(函館ラ・サール中学校)

《クラスメイトのジムが持っている絵具がほしかった少年は、誰もない昼休みにジムの机の中からその絵具を盗んでしまい、次の休み時間にその絵具が少年のポケットから発見されてしまいました。》

「泣いておどかしたって駄目だよ」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような、憎みきったような声で言って、動くまいとする僕をみながら寄ってたかって二階に引張って行こうとしました。①僕は出来るだけ行くまいとしたけれども、とうとうカマかせに引きずられて、階段を登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受け持ちの先生の部屋があるのです。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは入ってもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「お入り」という先生の声が聞こえました。僕はその部屋に入る時ほどいやだと思っただけはまたとありません。

何か書きものをしていた先生は、どやどやと入って来た僕達を見ると、少し驚いたようでした。が、女の癖に男のように頸の所でぶつりと切った髪の毛を右の手で撫であげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、一寸首をかしげただけで何の御用という風

10

をしなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取ったことを委しく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔付きをして真面目にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか」と聞かれました。本当なだけけれども、僕がそんないやな奴だということはどうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったです。だから僕は答える代わりに本当に②泣き出してしまいました。

先生は暫く僕を見つめていましたが、やがて生徒達に向って静かに「もういつてもようございませう」といって、みんなをかえしてしまわれしました。③生徒達は少し物足らなそうにとやどやと下に降りていってしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに、自分の手の爪を見つめていましたが、やがて静かに立って来て、僕の肩の所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返しましたか」と小さな声で仰いました。僕は返したことをすっかり先生に知ってもらいたかったので④深々と頷いて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだと思ったと思いますか」もう一度そう先生が静かに仰った時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震えてしかたがない唇を、噛みしめても噛みしめても泣き声が出て、眼からは涙がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになってしまいました。

「あなたはもう泣くんじやない。⑤よく解ったらそれでいいから泣

30

25

35